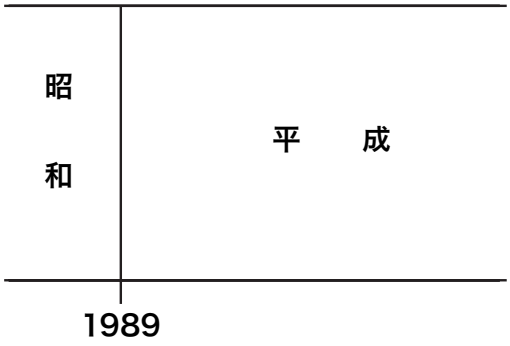
16. 平成時代

昭和64（1989）年1月に、昭和天皇が崩御（ほうぎょ）され、元号が「平成」となって、平成時代が始まりました。

この時以後も産業や文化、情報の面で地球規模で発展をとげている一方で大気汚染（おせん）、地球温暖（だん）化といった世界環境問題の解決が地球規模の課題として、わたしたちに投げかけられています。



(1) 門司港レトロ地区の誕生

① 門司港レトロ開発に向けた動き

門司は明治時代以降、港と鉄道と企業、そして祭りなどの催しなどで活気あふれるまちとして栄えてきました。

しかし、昭和30年代から、関門国道トンネルや関門橋の開通、海や陸の輸送方法の変化などから、まちからは活気が消えていこうとしていました。

そうした中、一つの転機が訪れました。

昭和62（1987）年、門司区谷町の門鉄会館（旧（きゅう）門司三井倶楽部（くらぶ））を解体し、その敷地を更（さら）地（あき地）として売り出す計画が立てられました。

これを知った北九州市は、大急ぎで国の重要文化財指定を取り付けて、ＪＲ（ジェイアール）門司港駅前へ移しました。

門司港駅周辺には大正時代の建物があることから、まちづくりの構想が次々とふくらんで、「門司港レトロ事業」に発展しました。

平成7年3月の門司港レトロが全面お目見えして以来、観光客は、年々増加していきました。この裏（うら）には、観光案内ボランティアや、地域ぐるみで編（へん）成された「門司港レトロ倶楽部」の活動がありました。地元商店街も建設物と商店街を合わせて、スタンプが全部そろうと、記念品をプレゼントするスタンプラリー、毎週土曜には門司港名物「バナナのたたき売り」を開いたり、と様々な努力を続けてきました。

② 関門海峡花火大会の始まり

この大会は、地元の企業約700社からの費用などの協力を得て、「門司まちづくり21世紀の会」と「下関21世紀の会」の共催で行われています。

会場となる門司区の西海岸埋め立て地と下関の埋め立て地（「アルカポート下関市」）には、合わせて数十万人もの観客が集まることができます。

この大会は、昭和62（1987）年7月24日に北九州市政25周年を記念して、ポート門司花火大会が行われたのが始まりです。

昭和63（1988）年8月13日には港鉄道100周年祭として、北九州市と下関市の共催で花火大会を始めました。すると、「毎年、続けよう」という声となりました。

こうして、両市が同時にともに行うこの大会は両市民の親睦（しんぼく）ときずなをさらに深め、お盆に両市に帰ってきた人たちを花火で迎（むか）えようという意気込（ごこ）みにまで発展しました。

海峡花火大会の様子
両市合わせて13000もの花火が
空中に咲（さ）きます

③ 門司港駅の「カウントダウン」

門司港駅の新年の催しとして、「カウントダウン」があります。

平成6（1994）年12月31日から翌年の1月1日にかけて、「門司まちづくり21世紀の会」が中心となって始まりました。

第1回をふり返って、事務局長の浜崎いつ子さんは、次のような話をしました。

ライトアップされた夜の美しい門司港レトロのまち並みを、わたしたちはいつも自慢（じまん）したい、見てもらいたいと思っていました。また、若者が集まるイベントはできないかと考えていました。そうして思いついたのが、「カウントダウン」だったのです。

1か月足らずの準備（じゅんび）期間しかありませんでした。不安でいっぱいの中、区役所の職員のみなさんが、意欲的に応援してくださったことが忘れられません。この日、23時30分を過ぎても、駅前に人の姿はあまりなく、「失敗だった」と思いました。ところが、23時50分ごろから駅前広場に人が集まりだし、ついにはいっぱいになったのです。みんなで肩（かた）を抱（だ）き合って喜び合いました。

門司港駅の大時計を見ながら、安全の鐘を20カウントします。関門橋のイルミネーションがパッと灯（とも）ると、花火が打ち上げられます。停泊している船がいっせいに汽笛（きてき）を鳴らします。除夜（じょや）の鐘の音（ねね）も交（ま）じり、人はみな三社参りに向かいます。幼い頃から知っている新年を迎える門司港の情景がよみがえりました。何とも言えない感激で胸がいっぱいになりました。

今では、5000人以上の人が集まって、1年を無事に過ごせたことへの感謝と新年を迎えるよろこびとを、内外の人々と共に祝う催しになっています。

また、阪神淡路大震災の年（平成7年）からは、集まった人々全員で黙祷を捧げています。

(2) これからの門司港レトロ

みなさんは、今のレトロ地区を北九州市の内外の人々がいこいを求めて訪れてくる所にすることについて、どのような思いや考えをもっていますか。

ここに、1つの計画があり、その実現が待たれています。

それは、門司港駅から「レトロ列車」がレトロ地区のそばを通る施設や、和布刈と対岸の下関市の火の山山頂を結ぶロープウェーの建設などの計画です。門司港に「観光に行きたい」「門司に住みたい」という気持ちになるまちづくりを目ざして、門司港地区の開発は進められています。